

平成26年度 第2回宮城県農村振興施策検討委員会

開催日時：平成26年10月29日（水）

開催場所：筆甫まちづくりセンター（丸森町）

議 事 録

宮城県農林水産部農村振興課

「平成 26 年度第 2 回宮城県農村振興施策検討委員会」（意見交換会）

司会（大場技術補佐）：現地の方をご覧頂きましたので、これから平成 26 年度第 2 回宮城県農村振興施策検討委員会の意見交換会の部を開催致します。

最初に、意見交換会に出席頂いております中区集落協定及び筆甫地区振興連絡協議会の関係者の皆様をご紹介します。

現地で説明を受けました中区集落協定の目黒代表様です。庄司様です。菊地副代表様です。以上、集落協定の方 3 名です。

それと筆甫地区振興連絡協議会の吉澤事務局長様です。

丸森町の木皿専門官様です。

木皿専門官：木皿です。地元、筆甫出身の役場職員は私一人のような状態ですが、どうぞよろしくお願ひ致します。

司会（大場技術補佐）：もう一人、丸森町から加藤主事も出席しています。

本日出席の委員の皆様の名前は机に貼っておりますので、委員の紹介は省略させていただきます。

本委員会について、条例第五条の 2 により、委員 8 名のうち半数を超える 5 名が出席しておりますので、本委員会は成立しておりますことをご報告致します。

また、県の「情報公開条例」に基づき、本委員会は公開となりますので予め承願います。

それでは、次第に従いまして、大泉委員長からあいさつを頂きたいと思ひます。

大泉委員長：今日は風の強い中、午前中現地調査を行いまして、これから意見交換の部に移りたいと思ひます。

中区集落協定の皆様、それから、関係者の皆様、ご苦労様でございます。

意見交換に入るわけですが、本来であれば今日午前中に見学をしました多面的機能支払交付金の下野郷集落資源保全隊やふる水基金の内町保全隊も含めて意見交換をすれば良いところですが、場所や時間の事情がありますので、多面的機能支払もふる水も共通する話ということで、代表して中区集落協定の関係者に意見交換会に参加して頂くということです。

ひとつよろしくお願ひ致します。

本委員会は、宮城県の農村振興を図るための検討委員会として、皆さんの意見を農村振興に活用させて頂きたいという趣旨でございます。忌憚のない意見をお願ひします。

それでは、一時間程ですが、よろしくお願ひ致します。

司会（大場技術補佐）：大泉委員長ありがとうございました。

それでは、ここから議事に入りますが、本委員会は条例で委員長が議長となることになっておりますので、ここからは大泉委員長に進行をお願ひ致します。

また、本委員会では議事録作成のため、ICレコーダーにより録音して記録を作成しますので、発言の際は恐れ入りますが、本日はマイクを準備しておりませんので、大きな声で発言を頂きたいと思ひます。

議事に入る前に、筆甫地区振興連絡協議会の方で、資料を用意しておりますので、折角ですので、意見交換に入る前に説明をさせて頂きたいと思ひます。

吉澤事務局長：わざわざ筆甫地区にお越しになられるということで、今回は筆甫地区振興連絡協議会と筆

甫地区のパンフレット、さらに地区の特産品であります「へそ大根」のパンフレットを用意させて頂きました。

へそ大根につきましては、集落協定の作業の一環として一般のボランティアの方々に援農の種まきをしていただいたということもありますので、集落協定と深い関係があるのかなと思っております。あとパンフレットの中身の詳細については、お時間がある時にゆっくり見て頂ければと思いますので、よろしくお願い致します。

それから、地区の会報です。毎月地域の良い所を撮って、会員に送付しています。

元々、ここは公民館だったので、振興連では、公民館の事業を引き継いでいます。

全国公民館連合会という組織の「公民館報コンクール」というコンクールというコンクールが全国組織でありまして、2回連続で第2位になっていまして、丁度これから、新しいコンクールの時期になっていきますので、僕じゃないですけど、うちの編集長が「今度は1位を取る」と断言していますので、新聞発表を楽しみにしてもらえればと思います。

大泉委員長：ありがとうございました。

中区集落協定は、中山間地域等直接支払交付金事業と集落支援事業2つに関係しているということで、色々お話を伺ったんですが。

まず中山間地域直接支払事業の方ですね、先程概要は現地で伺ったんですが、水田14ha、それから獣害被害について。

この制度全般、或いは中山間地の農業全般についてでも結構ですので、中区集落協定からご意見を伺いたいと思います。

目黒代表：概要といいますか、中山間地域等直接支払交付金事業が始まりまして、今年3期対策が終わるところです。15年経過しています。

幸いというか、残念と言いますか、組合員はそのままずっと15歳歳をとっています。

そういうことで、組織の組合員の入れ替えということは、ほとんどありません。それだけ高齢化が進んでいるということです。

来年から、第4期対策が始まるんでしょうが、その第4期対策も5年間の対策となると思います。

そうすると、20歳、20年間年を取ることになるんです。

組合員の平均年齢は60近くでしたから、80歳を超してしまうということです。

この中山間地域等直接支払交付金があるおかげで、耕作放棄地というのは相当防いでいることも事実です。

しかし、1期目から2期目に入る時点で、選択要件が厳しくなったもので、そのため継続して協定の組合員には入らなかったという方も結構います。その農地を見ると、全て今は荒れて、イノシシの遊び場になっています。

中山間地域等直接支払の協定に入った組合員には当然縛りがあり、農地として生産活動を維持していますから、本当にこの点は良いと思っております。自分の農地だから自分で管理するのは当たり前かもしれないけれど、きつい縛りでは困りますが、ある程度の縛りがあることによって、助成金があてられることによって、農地が維持されるというのは非常にありがたいなと思っております。

しかし、問題点は、この事業に入れば5年間は必ず生産活動を維持しなければならないんですが、先程も言いましたように、年齢がどうしても上がってきていまして、管理したいと思っても高齢化によってできなくなってくる組合員が多いんです。結構出てきます。

その場合、うちの方では組合員の担い手とその代わりに担って耕作放棄地を出さないように管理するんですが、問題は亡くなることによって遺産相続の問題が出てきます。

ここに住んでいる人間であるならば、一緒に家族として住んでいる人間であるならば、そのまま継続して「中山間地域等直接支払ですが、そのままお願いして管理して下さい」ということも出来るんですが、若い人はほとんど他に出て行っているために、その状況が分からなくて、親が入っていた組合だから「自

分には関係ないので手を出さないでくれ」ということが出てくるんです。要するに、人の財産だから手を出さないで、中山間地域等直接支払の協定から脱退したいということなんです、それは認められないんですよ。

あくまでも5年間は継続して組合員として管理しなければならないというような縛りがあります。その辺のジレンマがどうしても出ちゃうんです。ただ何度も言いますが、地元で生活している場合はそんな問題は無いんですが、遺産相続となった場合はそういう問題が懸念されるものですから、そのところを少し見直ししてもらえれば非常にありがたいなと思うんです。

制度上の問題点としては、その辺りが今後の4期対策の継続にあたっての大きな目標になるのかなと思っております。

大泉委員長：そうですね、そういう問題が出てくるでしょうね。

子供達といってもあと5年経てば息子達も60歳ですから、その人達の世代ですね。息子達が農地をどうにかしたいという時に、協定から出たら協定違反ということになるので、個人の判断でできるようにして欲しいという要望があるということですね。分かりませんよ。制度上出来るかどうかはともかくとして、背に腹は変えられない話としては出てきますね。

目黒代表：5年間は制度上、脱退するという事は出来ないんですね。やむを得ない事情、死亡した場合、相続が発生した場合は、やむを得ない事情ということで、脱退も可能だということにしてもらえれば、ありがたいんですが、それが出来ないものですから。

大泉委員長：遺産相続と言うけれど、所有者が息子になるだけですよね。その場合、自分で耕作するというのはいいけれど、どうなんですかね。

目黒代表：そういうのが全然ないんです。自分の農地に手をつけなくてくれと。これまで3期対策までやってきたんですが、そういうことがあったんです。

こちらで管理するから、お金も引き続きでるからと言っても、とにかく手をつけなくてくれと。全額返還するとお金が大きいもんですから、お願いしても中々難しいところがあったんです。

それが今度は4期対策となるのでさらに難しい。

だから、当然その辺を家族も考えて、後で他の組合員に迷惑を掛けるから、今回は混ざらないという人も出てくるんです。3期対策では結構5・6人いました。

大泉委員長：協定は何戸でしたか。

目黒代表：26戸ですね。一番最初の第1期から始まった時は大体50戸ぐらい。

それが段々、周りに迷惑を掛けられないという田舎特有の事情ですから、それがありますし、制度の縛りが強くなってくるとやれない、やりにくい。

今度は4期目に入るんだけど、色々事情を聞いているんですが、若干脱退したいというような人も出ている。

大泉委員長：半分は中山間地域等直接支払の交付金は出てないんですよね。そういう人達はちゃんと耕作は出来てるんですよね。

目黒代表：耕作が自分で出来る人は、喜んで混ざるんです。

大泉委員長：さっきのイノシシが暴れてるような感じの所になるんですかね。

目黒代表：そうですね。あとは、どうしても木が生い茂ってきますから、そうすると見られたもんじゃない。日本の国土を守るためにもこういった制度というのは、緩やかに上乘せしてもらえればありがたいですね。個人の財産に補助金を出すのもどうだという事も言えるんだろうけども、今の農地は正直財産にはならない。

大泉委員長：むしろどんどん価値は下がってるからね。

目黒代表：日本の国土だというような感覚で扱って貰えれば一番ありがたいんだけども。

田村委員：よろしいですか。今のお話で、そういうことも確かにあるのかなと思いました。耕作出来る人は喜んでこういう活動に参加して、出来ない人は入られないという象徴的な現場の問題だと感じました。

但し、そういう相続のタイミングで自分の土地に手を付けてくれるなというのは、凄く少数なんじゃないかなと思いました。そんなことはないですか。

目黒代表：そういう事態に、途中で亡くなっているのが3軒あり、そのうち苦勞したのが1軒あり、3軒のうち1軒なので、どうということではないんですが、組合員の年齢が高くなってきており、今後そういう可能性が非常に高いんです。

田村委員：感覚的な話しで申し訳ないのですが、こういうところで少なくとも育った方であれば、集団で何かやらなければならないということの子供の頃から見ているはずなので、そのような申し出をされる方は少ないのかなと思いました。

例えば、上の土は自分で耕す。だけどその一尺下はみんなのものみたいな感覚で、そうしないと地域の農地は守れないという、共同認識みたいなものが、こういった所ではあるのではないかと思ったんですけども。

そういうものも、若干最近は変わりつつあるということですか。

目黒代表：地元の間人はそう思ってるんだけども、一回出ちゃうとやっぱりね、関係なくなっちゃう。

どうしても物差しが経済の物差しですからね。

血の繋がりとかがそういった物差しではないので、難しいですよ。

庄子組合員：やっぱり出て行くと、なかなか帰って来る気はないですから。そうすると、荒れて終わらせても別に継ぐ人には関係ないんですよ。

我々からすれば、きちんと地域でこう保全しておきたいと思うんですけど。年に1回、2回来る人は

別にどうなっても良いという感じの方が強いですね。

田村委員：年に1回，2回しか帰れないからこそお願いしますと，ならない人も居るという事ですよ。

庄子組合員：そうですね。

長田委員：行政が仲立ちしても結構難しいんですか？

庄子組合員：行政，どうなんでしょう。今まで入ったことがない。行政そこまでは踏み込めないのでは。

木皿専門官：踏み込めない。

長田委員：別の意見ですが，良いですか。

外から見ると，丸森町，筆甫とか中区とかは少し事情が違うかもしれませんが。

新規就農者とか，外からの人間とかが，宮城県の中では，結構多い地という印象があるんですね。

現に，私出版社をしていたんですが，デザイナーをやっていた人が丸森町に行って新規就農したいということもあって，今も交流があるんですけどね。

そういうことで，外からの移住者が結構多いという印象があるんですが，さっき高齢で大変だと聞いて，ちょっとビックリしたんですけども。

もちろん，入ってくる人達はすぐニュースになりやすいし，その比率にしたら微々たるものかもしれませんが，そういった点では丸森町は上手なのかなと。

立地的な魅力というのがあるのかなという印象を持っていたんですが，放射能騒ぎでそれが今ちょっとね，ストップしてるのかもしれませんがね。

目黒代表：3年前まではそうです。

庄子組合員：筆甫の状況みると，私も息子がうちに居ないんです。人それぞれの人生の生き方があるから，無理矢理止めておくことも出来ないし。

一方，どうしたら良いかと考えた時，やっぱり筆甫が好きで筆甫に住みたいという人をいかに入れるかというのが大事だと思ひまして，平成10年から，この活動をやったんです。

それで振興連の事務局長の吉澤君も入ったんです。

長田委員：外からの方ですか。

吉澤事務局長：はい。仙台です。

庄子組合員：その放射能前までは，テレビに取り上げて頂きましたので，平成20年か21年頃には毎月のように筆甫について問い合わせがあったんです。それで期待していたんですけども。

ところが、それが放射能で一気にダメになってしまいました。

でも、3年くらい経つとまた少しくらいは話しがあるんで、他力本願ですがそういう方々に守ってほしいなど実は思っているんです。

長田委員：それに関しては、丸森町の行政の仕掛け方というか、フォローの仕方が上手なのかなという印象を持っていたんですが、どうなんですか。

吉澤事務局長：好きにやらせてもらってる。

庄子組合員：行政関係なく、我々組織を作りまして。

インターネットで色々配信したり、あとは「ひっぽさこらいん」という田舎暮らし体験みたいなことでイベントをやって来てもらったりして、その中から筆甫に足を運んでもらって、住んでもらうという感じなんです。

行政とは全然関係なくやっています。

吉澤事務局長：ちょっといいですか。僕も移住させてもらった人間として、農地の面でいうと移住して来た人が機械を買ってトラクターを揃える、農作機械を揃えて面積を住民の人の代わりにやるといったような発想はないんですよね。

農業として、ここで現金収入を得て暮らしていこうという意識を持っているというよりは、今でいう農的な暮らしを実現させたいと思うような人が多いので、農地を守る為に自分が何町歩も面積を耕しますという意識での移住者というのは、うちの地区とか丸森町には非常に少ないと思います。

若い人が居てもその人が農地を守る担い手としては今までは育成されてこなかったし、現状としてもそうになってないというのが実情だと思います。

長田委員：それでは、新規移住者達は土地を借りてるという形ですか。

吉澤事務局長：購入してる方も居ますし、あとは本当に自給用で、借りた家に付いてるほんのちょっとした猫の額くらいの面積で自給用にやって、職は別に持つといった形の方が多かったんで、何反歩とか持つてるという人は本当に一人居るか居ないか。

木皿専門官：移住者で、農業で生活している方というのは結構少ないと思います。施設園芸とか花を作ってる方が館矢間におられます。

それから耕野地区には養蜂をされてる方がおります。

あとは筆甫では、味噌ですかね、加工といったことをやられている方がおられますけれども、全体的にみますと移住された方は半農半Xといいますかね。一方では、確かに農的な暮らしをするけれども、それ以外に別のことも何かしら収入源を持っている方です。

丸森町としては、そういった方々が活躍出来るような形、観光といいますか、そのような形で後押しする、例えば観光パンフレットなんかには藍染めをされる方がいます、味噌作りとかチーズを作る方がいます、というように、そういった形でパンフレットに入れてPRさせて頂いたりしています。

ただし、チーズ作りなんかは今回の震災の影響で別な所に移住してしまいました。

大泉委員長：震災の影響が大きいね。

沼倉委員：数年前に、耕野地区の組織の方に一度行ったんですけど、新規就農者というのは入ってこないけれども、「定年退職になって家に戻ってくる 60 歳くらいの人達が連続的に戻って来るので、この地域は結構安定してるんです」という話を聞いたんです。

それは耕野地区の話ですけれども。

筆甫は、さっきおっしゃったように色々な人達が入って来て、町も福祉の取組も頑張っていてそれなりにやっぴらっしゃるのかなって思っていたんですけども、筆甫の場合は耕野の人達みたいに 60 歳になって、定年になったので帰って来るという人達がとても少ないということですか。

庄子組員：少ないですね。現実的に何人か。

沼倉委員：町に新しく入ってくる人達よりは、やっぱり生まれ育った所に帰って来るという人の方が頼りにはなると思うんですが。

庄子組員：ここに入りたいということで空き家を探している時に聞くわけですが、そうすると、なかには「定年になってから帰って来るから貸せない」という話は結構ありましたね。しかし、誰一人帰ってないですね。

でも、全然Uターンの人が居ないわけではないんですけども、少ないですね。

沼倉委員：何年か前に来たことがあるんですけども。このパンフレットにお蕎麦屋さんありましたよね。清流庵。

庄子組員：震災でお客さんがぱたっと来なくなったということで、残念ながら今閉店中です。再起を賭けて計画中です。

沼倉委員：私が来た時は混んでいて、隣の人の肩がくっつくくらいで食べていたんですけど。そうでしたか。

吉澤事務局長：お蕎麦屋さんと地域の農家レストラン、あと直売所が閉鎖ですね。食関係が。

現実的に、山菜や猪料理を出していたんで、客さん来ない。直売所のメインは山菜・きのこでしたので、難しいと言われました。

長田委員：金森さんのところも、もうやらないと言ってるそうですね。

吉澤事務局長：ちょっと煽ってるんですけど。

沼倉委員：あんまり長年休むとその分年取るしね。

吉澤事務局長：違う再起が出来ないかを相談させてもらっています。

大泉委員長：作ったらいいじゃない鉄瓶を。たたら製鉄。

庄子組合員：たたら製鉄は、年4回やっているんですけど。

原料は出来るんですけど、その加工は、これはちょっと他の所で2年くらい修業しないと出来ないんですね。400年の歴史を蘇らせてみんなでやろうということで、今年で12年目になりますが。

大泉委員長：そういう意味ではどうなんですか。19haを纏めて「誰かやらない？」と言って、「俺等は地代もらえれば良いよ」というような、そういう方法は考えられないですか。

目黒代表：結局ここをどう維持していくかということが大きな問題になってくると思うんですよね。

木皿さんが担当なんですが、集落営農的なことやらざるを得ないんじゃないかと。

但し、集落営農をするにも補助金を全て集めながらやれば一番やりやすいかなと思うんですが、それもそれで集めることに対しては色々縛りがあって難しいこともあるので、その辺も特区というように認めてもらえればと思うんです。

このような所を維持するのは本当に大変ですので、そのような事を全て網羅しながらやらざるを得ないんじゃないかと考えています。

大泉委員長：農地をそれなりに整備して、日本全国「誰かこの風光明媚な筆甫で農業をやりませんか、14～15ヘクタールあります」と募集するとか。

目黒代表：・・・。

大泉委員長：「どうして皆さんそう何ですか」と言われたら、「高齢化してね」、「やる人居なくなってるね」と言ってね。そういうのは考えられないですかね。

目黒代表：そうですね。そういう人が出てくれればありがたいんですけども。

大泉委員長：そうだね。それこそさっきは、震災前は色んな方が半農半Xでも入ってくるぐらいのコミニティ力があつた丸森町だから、意外と本格的に農業をやる人達が出てくるかもしれないね。農地はあるんだから、そうなるかもしれない。そうならないかもしれないけどね。

目黒代表：正直そうなんですよ。ここ別にそんなに所得がなくても暮らせる所だったんです。山菜もなに

も豊富でしたしね。それが原発事故で何も出来なくなりました。

別に所得が少なくなっても、慎ましい生活かもしれないけども、内容は豊かだったんです。そういうことで十分暮らせていた所ですから。

だからそういうのを理解しながら来てもらうにしても、未だ今のところ食の問題が一番シビアなもので難しい。

大泉委員長：他の市町村と比べて、比較的オープンな感覚を持っている町だろうなと思っていたんですけどね。ところで、館矢間で農業をやっているというのは鈴木君のことですか。

木皿専門官：そうです。学さんです。

大泉委員長：学ね。あれ僕の教え子。2千万だとか3千万だとか喜んでいただけね。

だから館矢間の下の方じゃなくて、こっちの方でやってみたらって言ったら。

木皿専門官：元々、最初は耕野に入ったんですね。

大泉委員長：そうだね。そんなこといっても、今更また山の上に上がるってことはしないかもしれないけど。

木皿専門官：ただ、彼は今でも耕野との繋がりがかなり深くて、例えば中山間地域等直接支払の事務局なんかもやったりしています。

大泉委員長：どちらの事務局ですか。館矢間の。耕野の。

木皿専門官：耕野の方の手伝いをしています。

大泉委員長：手伝いをしているの。立派ですね。

吉澤事務局長：今委員長からあった、こういうのをバンと打ち上げて募集するといった話は、それが震災前であれば、こういう計画を作って「こんな面白い事やる」「こんな面白いことやろう」ってことをブチ上げられた気がするんです。

ただ、現状、もう震災から3年半経つという意見もありますが、実はこれまでの3年半というのは本当にまだ混乱状態がずっと続いているんです。

除染の問題、賠償の問題、様々な食品の問題があって、落ち着いてこれからの地域をどうするかといったことの議論を深める事が出来ていなかった状態でした。今でもそうなんです。

やっと最近になって、この地域の役員、理事会とかの中で、今後の10年間でどういう方向に進んで行ったらいいかという議論をしようとしている段階です。

それがまた見えてくれば次の一歩が踏み出せるんですけども、なかなかこの3年半の中で、落ち着いて

自分達の状況をちゃんと踏まえて、「次にこの手を打とう」といったような事が出来なかったんです。

3年半前であれば、山の幸と移住者、これを売りにして「どんどん色んな事を仕掛けようね」っていうようにみんなが盛り上がったんです。

その盛り上がりも原発事故で「スパーン」ってやられたので、もう一回気持ちを新たに「じゃあ、これから考えよう」という気には未だなっていないで、そこまで良い話が出来てないというのも実情としてはあります。

大泉委員長：凄く良く分かる話です。残念ながらね。

沼倉委員：ヒマワリは今年からですか。

目黒代表：前からやっています。初年度は1期対策からです。ただ観賞用としてやって、あと2期対策の時に油を採った事もあるんですが、自分達で絞るということでなかなか採算的にも合わないし、自家用として、みんなに配りました。

今回3期対策では、昨年から援農ボランティアをお願いして何かやろうと。要するにここの人間が少ないものですから、何をやるにしても人が足りないということから、ボランティアを頼りにせざるを得ないということで、実施しております、今年搾ったわけですが、これがここにあるような状態です。

沼倉委員：販路はあるんですか。いくらぐらいで卸す予定ですか。

目黒代表：販路はまちづくりセンターの方で・・・。

吉澤事務局長：販路はこれからですよ。

庄子組合員：とりあえず1件だけありました。ヒマワリ収穫した時筆甫に居まして、「出来たら買いたい」という方が1件ありますけど、あとは無いですね。

沼倉委員：いくらぐらいで。

吉澤事務局長：180mlのやつで、大体1,200・1,300円位から1,500円位が相場になっているんで、それを色々計算してこれから決めたいと考えています。ヒマワリ油、地油は高いんですよ。

沼倉委員：何に使うと美味しいんですか。

吉澤事務局長：普通の食材として油を使えるんですけども、よくフランス料理とかですと、そのまま油をパンに塗って食べるとかしています。

長田委員：オリーブオイル風にね。

吉澤事務局長：オリーブオイル風に、そういう食べ方も出来ます。どういう食べ方が良いか分からないので、これから研究します。

沼倉委員：パンに付けて食べるのって、段々広がってきてますよね。

吉澤事務局長：そうですね。

長田委員：やっぱり食べ方の提案も含めてですね。

吉澤事務局長：そうですね。売るとしたらそうですね。

長田委員：猪の被害があるということで、何年仕向けるのかと思ったんですけど、これからずっと継続していく考えはあるんですか。

目黒代表：それは継続していく方向で。一番取り組み易い。ただ猪の害が出始まったんで、その対策をどうしようかと。

吉澤事務局長：景観作物としては、綺麗なヒマワリ畑が出来るのでいいんです。ただ、これが搾油用の種を使っています、油成分が多いので猪に倒されるということも懸念されます。

目黒代表：本来は、農地を荒さなくするためにヒマワリが作付けしやすいというところに、あと+αで油を採れば、違った収入もあるんじゃないかということなんです。

この油は実際クセがあるんです。普段我々が食べている油とちょっと違うもので、クセがある。食べると味が全然違うんですよ。

普通のメーカーで売っている油は、いろんなものを入れて、要するにみんな食べやすい様に作られているものが当たり前の油だと一般に思っているんです。

「これ味変じゃないか」というようになってちゃっているんです。

吉澤事務局長：今、お皿持ってきますから。

沼倉委員：例えば、エゴマ油なんて独特な匂いがするんですけど、でも血液の流れには凄く良いと言われると、ちょっとクセがあっても食べちゃったりしますね。

目黒代表：逆にクセがあるのを売り出すのが一つの方法という見方もしているんですね。

みんなに合うような味にしたのではやっぱりダメだと。クセがあるのが却って売りだということをPRする。普通、この程度で1,000円も2,000円も出して買う人なんてなかなかね。

普通、この程度だと100円・200円だからね。普通の一般的な油であればね。

吉澤事務局長：健康成分は高い。数値的な事は今言えないですけど、やはり健康成分は高いと言われていきます。

長田委員：それもきちんと数値化してラベルに表記してね。

大泉委員長：ダイエット食品，健康食品とかね。

長田委員：そうそうそう，特別な油として売るしかないないね。

吉澤事務局長：今ちょっと小皿が来ましたので。

庄子組合員：成分的には，かなり健康には良いそうです。

どういう成分が入って健康に良いのかわからないけど，他県では「これはオリーブ油の次に良いんだ」とかって言っている。どういう訳でどこに良いのかちょっと分からないんだよね。それもきちんと調べる必要がある。

大泉委員長：大学の方で調べて頂いて。

沼倉委員：色麻町で作っているエゴマ油なんですけど。たまたま色麻町で買って来たんですけど，やっぱり独特の匂いがする。でもエゴマって機能的に凄く良いって言ってて，結構皆さん買うみたいですよ。

吉澤事務局長：ヒマワリの三本木ありますよね。あそこは除臭してるんです。脱臭って言うんですか。ただ，僕としては逆に脱臭するよりも，これで売るべきだと思っていて，これで買って下さる人に売るという特色を出していかないと，これしかないのかなと考えています。

沼倉委員：思った程クセないね。

大泉委員長：無いですね。さらっとしているね。

沼倉委員：やっぱりフランスパンがあったら良かった。

大泉委員長：逆に油としては弱いかもしれないな。

沼倉委員：あまりクセ感じない。

長田委員：あまり嫌な感じはしない。

文屋専門委員：これは今販売してるの？

目黒代表：いえ、まだですね。これから。

長田委員：あれが全部ではないでしょ。

吉澤事務局長：今年は、あれが全部です。

長田委員：住民で買ったら終わりだね。

吉澤事務局長：住民は買いません、たぶん。住民はもらう物だった良いけど、買わない。

長田委員：貰うんだったら良いよ。

吉澤事務局長：贈答用にはなるけど、自分用には買わない。

大泉委員長：昔は、納豆作ったりなんかする人が作業に出ると必ず何本か貰って帰るみたいなの。それと同じ様にこの作業に出た人が何本か貰って帰るみたいなの。

庄子組合員：高級だからな。

高橋副委員長：枝野で菜種油を加工して販売してなかったですか。

丹野課長：白石の越河で、転作で植えてた菜種を絞って、これ位の容器に入れて 700 円ぐらいで、直売所で。今もやってるかどうか。前はやってたんです。越河で土地総をやっていた時に。

高橋副委員長：さっき、そろそろ集落営農を考えなきゃというお話があったんですけど。

今は中山間地域等直接支払をみんなでやっている。

いわば共同作業をやっている、みんなで考えてやっている。一步踏み込んで、みんなの農地で、農業経

営そのものをみんなでやる仕組みを作りたいって考えているのだと思うんですね。

ということは、まだこれから先、何年か10年か20年、きちんとやれる核になる方がいらっしやるのだろうかというのを一つ確認したいのと。

そういうことであれば、集落営農というやり方で、地域をみんなで共同経営していくというのはどうでしょう。

県内あちこちでやっている話ですので、そういったことへの支援策は、農協さんも含めて、県内ではいくらかでもありますね。そういった方々で法人化して頂くと、農地を借りる権利が生まれて、安定した農業経営の基盤が出来ます。

そういう仕組みは、いろんな所でも出来つつあるということですので、そういう方向に皆さんの意思が固まっていけば、道は出来ると思うんです。

直接こういう話になると、経験がないということでしょうけれども、例えばここはそれなりに冬になれば雪も降るし、農業だけじゃなくて、消防も含めて、地域全体の生活を守っていく担い手の必要性もたぶんあるんだと思いますね。

地域のいろんな事をマネジメントする会社と言うと少しハードル高いかもしれませんが、そういう組織なんかがあって良いんじゃないかなと思います。

そうであれば、例えば東京に出ている人達に「『ウチの墓を掃除して花を手向けてちょうだいね』って、墓守を請け負います」とかということになる。

その流れであれば、さっきの話にあったような「相続したら俺の農地に手をつけるな」、そんな話しではなくて、むしろ「ウチの田んぼや畑を荒れないようにお願いしたい」という話しになるんだと思うんですね。

そういった地域の農業、林業も含めて、総合的に受け取れるような存在になって、地域経営会社みたいなものがあつたら良いんじゃないのかなと思いました。

目黒代表：そうですね。「なんでもや」的な。

最終的にお金が絡んでくるんですけども、経済的な問題。

ウチらの中山間地の方には、水田が14町歩ありますが、14町歩全てで米を作って販売しても採算合うかという、正直言ってあいませぬ。

そういったようなことをクリアしないとなかなか組織というのは難しいと思います。なんだかんだいってもお金で決まっちゃいます。その辺をどうするかが一番問題なところだと思うんです。

私も畜産・酪農をやってるものですから、筆甫地区の水田の現状を見た場合、米以外の作物が果たして作れるかという非常に難しいんですよ。

湿田が多いものですから、米以外の作物っていうのはほとんど作れないという状態です。

その中で耕畜連携的なものを目指すには、今「ホールクroppサイレージ」というのがあって、稲を作って、途中で刈って、それを牛のエサにする、そのやり方が一番やりやすいのかなと思っております。

畜産農家も結構年齢がいつていますから、自給飼料を生産するところまでは手が回らなくなってきており、こういった「ホールクroppサイレージ」みたいなものを利用する可能性というのが非常に高くなってきておりますので、やはり田んぼは田んぼとして稲を作る、それが最終的に人の口に入るか牛の口に入るかの差だと思うんで、そこら辺の可能性があるのかなと思っております。

何度も言うように、それもお金が絡むものですから、どちらも田植えとかという作業自体はありますが、それを収穫する機械という、また別な機械になっちゃうからね、そういったものをクリアするにはそのへん整理が必要になってきます。

あと、任意組合が果たして中山間地域等直接支払をやるかという色々問題があるんでしょう。

個人の農家で中山間地域等直接支払はできるけれども、任意組合が農地を集めて、それが中山間地域等直接支払の補助金の対象になるのかという難しいですよ。

一度改訂してもらえば、どうということは無いんだけど、改訂するまでにそういったものも利用しながらやっていくのも一つの方法かなと思うんです。そのような問題が若干ありますから、その辺を県とか役場の方で色々指導してもらえればと思います。

高橋副委員長：一生懸命考えていくと、正にそのとおりだと思うんですけど。

皆さんの年齢構成とかね。皆さん若い方だと思いますので、まだまだ大丈夫だと思いますけど。

目黒代表：そんなに若くも無いんで、時間も無いからね。ちょっとだけ先に進めないといけないと考えています。

文屋専門委員：ちょっとお聞きしたい事があるんですけど。この「筆甫ふるさとだより」の中で、敬老会の話が入ってありますが、筆甫の人口から簡単に計算しますと、2割強の方が敬老会に入っていることになりましたが、ご当地では、敬老会は何歳から対象となりますか。

吉澤事務局長：75歳です。

文屋専門委員：75歳でこの数字ですか、そうすると65歳以上といたらもっと増えるんですか。

吉澤事務局長：42%です。

文屋専門委員：人口は678名となっていますが、丸森町の一つのエリアの筆甫という地域は、どういう位置付けになりますか。

例えば、山間部だとか都市部だとか平野部だとかという言い方の中では、ここは山間地とみた方が良いんですか。

庄子組合員：山間地です。山が8割位ですね。

文屋専門委員：現地でも、米の価格が下がって営農が難しいんだというようなお話を伺ったんですが、そこでお聞きしたいのは、米の価格が下がったという表現、どこでもそう言ってるんです。

私は大崎市の岩出山から来ているんですが、やはり大崎市の岩出山も米どころでございまして、ここの筆甫よりは田んぼの耕作面積が大きいと思いますが、そこでもやっぱり「米の価格が下がって、とても農家はやっていけないだよ」という言葉は聞きます。

そこで、何故その「価格が下がっているのか」というところに焦点を当ててみたいと思ひまして、今、機会があればお聞きしたいと思ひているんですが。どうですかね。ご当地では「価格が下がる」という要因は何だと思ひますか。

確かに安く食べられた方が良いのは分かる。

目黒代表：大きく言えば需要と供給の関係だろうけれども、米が安いから米生産やらないっていうのは、私個人から言わせれば、それは所詮言い訳だと思うんです。

そんなに安くたって、今米づくりしているのは安い高い関係なくて、自分の農地を守りたいという一心で年配者も米を作るんです。

別に、米の専業農家はいません。「農地を守りたいんだ」その思いだけです。その思いが高齢化によって「そろそろ限度かな」というのを言い訳にするのも嫌だから「米が安いから」という話しは、あくまでも個人的な見解ですけど、私には言い訳にしか聞こえない。

実際そんなこと言ったら「なに言ってる」って怒られるかもしれないけれどね。

文屋専門委員：といたしますのは、ご当地のみならず、農業に携わる米生産者に関していたしますと、やはり米の価格というのは死活問題だという点から、ここに生協の方もおられるんで、販売する方は消費者に向けての販売価格というのは決して低価格じゃないんですね。それなりの価格となっています。

だとすれば、生産者がもう少し何をすべきなのか、そこをこのところを考えるべきではないかなと常々思っているものですから、皆さんに良い知恵があったらお聞きしたいと思っています。

ただ、今言われたようにご当地では「農地を守りたいんだ」という、それも大きな目的でしょう。

国土保全という部分でも十分な役目を果たすと思うんですが、それにプラス、やはり先程から言ってるように、何事をするにもお金というものが必要になってくる時代ですから、米の販売価格、生産者価格というものを、うんと高くしろとは言わないんですが、なんらかの構築ができたなら常々考えているものですから、何か良い案がないかと思ってお聞きした訳です。

庄子組員：七ヶ宿なんかでは、特色ある「山の雫」というものを出して売りにしていますが、ここは清流ですから、それを最大の売りにしてやれる方向があるかもしれないんですが、なかなかそこまで踏み切った商用までは進まないのが現実ですね。

文屋専門委員：確かに委員会でも6次産業化のお話出るんですが、生産者が生産すれば良いというんじゃないで、やはり製品化していくノウハウまで培っていかうというのが6次産業化といわれるものなんで、この辺が大きな課題になっていくのかなとは思ってはいるんです。

その中でも、今言ったような、具体的なポイントを絞った考え方というか、対策というか、そういうものがあるべき時代かなと思います。

是非頑張ってもらえればと思います。

庄子組員：米以外に、筆甫のものが欲しいと言われているものが現実にあるんですけど、なかなかそれが出来ない。

ここはインゲンの産地の時代がありまして、寒暖の差がありますので色はうんと良いんですね。

ただ農協の合併する前、丸森町農協時代にはほとんど農協で卸していたんだけど、その時は筆甫だけではなくて、他の地区のも一緒に出しちゃうんですね。

そうすると、なんぼ筆甫のものが良かったって、ブレンドされて同じになってしまっただけで高く売れないというのがあったんです。

だから、未だに筆甫のインゲンが欲しいって仙台市場では言ってるという話を役場からきくんです。

長田委員：インゲン豆ですか。

庄子組員：そうです。だからといってやれるかというと、残念ながら労働力が足りない。

その他に、去年から花作りが始まっているんですけども、これも寒暖差があって、かなり色が良いらしいんです。

だから、もっと需要があれば「これ筆甫のだよ」と出せるようなんですけど、「それじゃ、それやろう」

という人もなかなか居ませんね。

ほとんど勤めていますので、そういう労力にはならないのが現実です。

沼倉委員：改めて聞きますが、筆甫の主な産物というのはやっぱりお米なんですか。

庄子組委員：米を出荷してる人は30人か40人位です。

筆甫の戸数は、270～280戸程。米を出している人はそれ位。

全体的に生産物が少ないから、米と言われれば米かもしれません。

目黒代表：出荷額からいうと、酪農、牛乳が一番です。

長田委員：農地を守るために耕作して、米を作るといような受け取り方をしましたが、「こんな所で別に米作らなくても良いじゃないかな」と思ったんですよ。

米の値段もどんどん下がるしね。こんな急峻な農地が多い筆甫なんか、特にね。

作るんだったら自分達の食べる分くらいで、他のものをみんなで知恵を出してね。

ヒマワリもその一つでしょうけれども、他にも何かあるんじゃないかなと、インゲンとか、花とかの話しが出てきたので、むしろそっちの方に力を入れた方が良いのかなという気がしました。

目黒代表：私も、正直米に拘る必要はないと思うんだけど、ただ作れるのが米しかないというのも現実なんです。水田で、しかもぬかる湿田ですから、米を作るのに適している。

高橋副委員長：これだけの農地をこなすにはね。

文屋専門委員：畜産をやっていると行ってたよね。岩出山でも畜産農家で牧草に放射能の害があって大変迷惑しており、交付金的なものの援助を受けているという話を聞きましたものが、ご当地ではそういうことはない。

目黒代表：同じです。放射能の関係で牧草類は自粛です。

除染した時点で検査をして、それでOKが出れば良いんですけど、除染しても正直出ています。

制限というのがあるんで、放射能問題は大変です。が解除されるまで大変なんです。

文屋専門委員：だから先程、高収入ではないけれど、住めば都じゃないですが、地元の生活というのは原発事故の問題が出る前までは豊かだったというお話をされたので、ああなるほどな、こういう所にも影響が出ているのかと思ったんですよ。

目黒代表：お金云々ではなくてね、生活する分においては豊かな場所だったと私は思うんです。

大泉委員長：最後にお伺いしていいですか。集落支援事業をやってみてどうでしたかね。ざっくりばらんな

感想は。

丹野課長：援農ボランティアね。

目黒代表：正直言って助かります。助かるだけでなく、さらにそういう人達が来た時には何となく賑わいがあるんですよ。

要するに活気があるというか。そうです。そういう面でも活気がでると周りの住民もそれにつられてなんとなく元気が出るんですね。そういう面の良さというのが正直あります。

その数を多くすることによって、活気を取り戻したい。

どうしてもメンバーが集落だけではね、段々ね。

大泉委員長：「私はいいけどさ」ってなるもんね。

目黒代表：言葉は悪いけど、「若い姉ちゃん来るから」っていうとね、そうなる。

文屋専門委員：どこでもいえることだね。

沼倉委員：お母さん達がカレーを作って振る舞ってくれたりしてたみたいですけど、それはどうですか、労力的には負担にはなってないですか。

目黒代表：喜んでやってる。

吉澤事務局長：最初は援農ということで、皆さんにお昼を持参してもらったんですけど、皆さん何食べているのかなって見ると、県の方々も含めてコンビニで買ってきているんですよ。

せっかくここに来てコンビニかでは、味気ないよね。

ちょうど宮城大学の学生さんとかは、援農ボランティア以外の地域のイベントとかにもきて頂いていたので、少し材料代をいただいてお昼を振る舞いました。

振る舞うことで、地域のお母さん達の心が出せますので、そういう交流の方がただ単に援農というだけじゃなくて、地域と参加者が交流する時には、やっぱり食事が大事だと思うんです。

そういうことでしか自分の能力を提供出来ないよという集落協定のお母さん方もいて、そういう人の役割も付けたという意味では非常に良かったのかなと思っています。

沼倉委員：同じものを食べて「美味しいね」と言ったり、おしゃべりをしたり、凄く良いと私も思うんですけど。私は生協なんですけど、いつもそういう感じなんですけど。

ただ、出来るだけ地元の人に負担を掛けないようにするのが良いのかなって、一方でそういう思いもあるものですから。

目黒代表：最後はお母さん方も、若いお兄さん達とハイタッチして分かります。

大泉委員長: そうなんだよ。ウチは事業構想学部だけでも 800 人居るからね。筆甫の数より多いんだよね。

分かりました。色々ありがとうございました。

中山間地域の振興って、言う程簡単じゃないっていうね。

どうやってやったら良いかってマニュアルもあるわけでもないのに、一つ一つ問題を潰していく、それも出来るかどうか分からない訳ですけどもね。

今日は、農地に対する思いが農家個々で違う、それを協定でやることの難しさというのを教わったんじゃないかという気がしました。

何をやるにも「なんでもや」みたいなのが出来れば良いんでしょうけれど、その場合、農業から入った方が良いのか、商業から入ったら良いのか、色々入口があるんでしょうけれど、農業から入るとなんか広がり欠けるような気がしないでもないんですけどね。

地域のマネジメントといたらいいんでしょうかね。それが大事になってくる時期なんだろうと思いますが、それを作るにも先立つものが必要だし、なかなか難しいのがあるのかなというお話がありました。

だけど、潰せるものがあつたらそれを潰すというか、課題を整理してクリアしたいと思います。

本日は、色々ご協力を頂きまして、貴重な時間をありがとうございました。

ヒマワリの油が少しでも高く売れるよう祈念しまして、御礼申し上げます。

どうもありがとうございました。

司会（大場技術補佐）: 本日の意見交換の内容を踏まえ、本県の農村振興に役立てていきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

以上をもちまして、本委員会の意見交換会の部を閉会致します。

皆様ご苦勞様でございました。